

# モモの摘花と結実確保

県北農林事務所伊達農業普及所  
JAふくしま未来伊達地区モモ生産部会

## 1 今後の気象推移

仙台管区気象台の1ヶ月予報（令和4年3月17日発表）によると、今後1ヶ月は、気温が平年よりも低い確率が20%、平年並が40%、高い確率が40%となっており、平年並みか高くなる見込みである。降水量は平年よりも少ない確率が30%、平年並が30%、高い確率が40%となっており、ほぼ平年並となる見込みである。

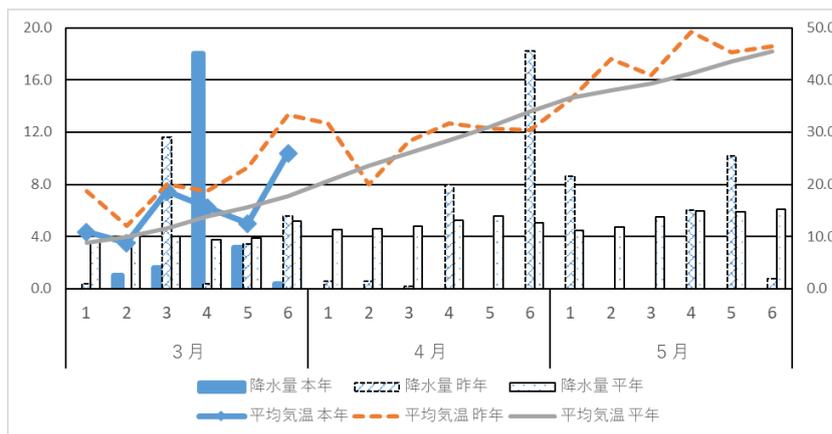


図1 平均気温と降水量の推移（観測地点：梁川町アメダス）

## 2 生育状況

**「あかつき」が平年より1日遅く発芽しました。**

伊達管内の調査地点（桑折町伊達崎地区）における「あかつき」の発芽日は、3月25日で平年より1日遅かった。開花期の生育は、直前の温度の影響が大きいため、今後の気温の推移に注意しながら、開花前の薬剤散布等作業が遅れないように注意する。

表1 「あかつき」の開花始め（調査地点：桑折町伊達崎）

年次	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3	R4	平年
開花始め	4/14	4/15	4/11	4/5	4/12	4/3	4/8	4/2	3/30	未	4/13

※平年は昭和57年～令和2年までの平均値。

## 3 凍霜害対策

**昨年は、4月の凍霜害により甚大な被害が発生しました。  
今後最も危険度の高い生育ステージになるため、対策の準備と徹底をお願いします。**

### (1) 事前対策

- ア 地温上昇を図るために、下草を5cm程度に刈り込むとともにマルチは凍霜害の危険期を過ぎてから行う。
- イ 1回あたり15～20mm程度を目安に5～7日間隔でかん水を実施し、土壌水分と空中湿度の確保に努める。
- ウ 散布資材や燃焼資材などの防霜資材を、いつでも対策が実行できるように準備しておく。
- エ 燃焼法を行う場合は、以下の点に留意しながら行う。
  - (ア) ほ場の気温が、安全限界温度より1℃高い温度帯に達したタイミングで点火する。
  - (イ) 点火は原則園地の周囲から始めるが、くぼ地など冷気がたまる場所があれば、最初にそこから点火する。

(ウ) 点火後は気温の変化を観測しながら火力を調節するが、日の出前は最も気温下がるために火力が落ちないように注意する。

(2) 事後対策

ア 開花期に凍霜害が発生した場合、着果量を確保するため人工授粉を徹底する。

イ 落花期以降に凍霜害が発生した場合は、被害状況が明らかになるまで摘果を遅らせた後、例年被害が少ない園地や早生品種の樹から摘果作業を再開する。

○「あかつき」の発育ステージ別の安全限界温度

発育ステージ	花らい赤色期	花卉露出期～満開期	落花期～幼果期
			
安全限界温度	-2.6	-2.5	-2.1

※「安全限界温度」は植物体（花芽）の温度がこの指標以下に1時間おかれた場合にわずかでも花芽が障害を受けるおそれがある温度を示している。

4 摘花

昨年の凍霜害の被害状況、摘らい作業の実施状況を考慮した上で、  
ほ場ごとに実施の程度を判断してください。

摘らいが終了しなかった場合や摘らいの見落としがあった場合の補助的な作業として実施する。

時期：開花期～落花期

方法：花粉のある品種では摘らいに準じて花芽の70%を目安に実施する（図2）。

なお、「日川白鳳」「奥あかつき」「ゆうぞら」等の結実が不安定な品種は50～60%を目安に摘花する。「川中島白桃」「はつひめ」等の花粉が無いまたは少ない品種は、人工授粉の実施を前提に50%程度摘花する。樹勢の弱い樹では標準より強めに摘花する。

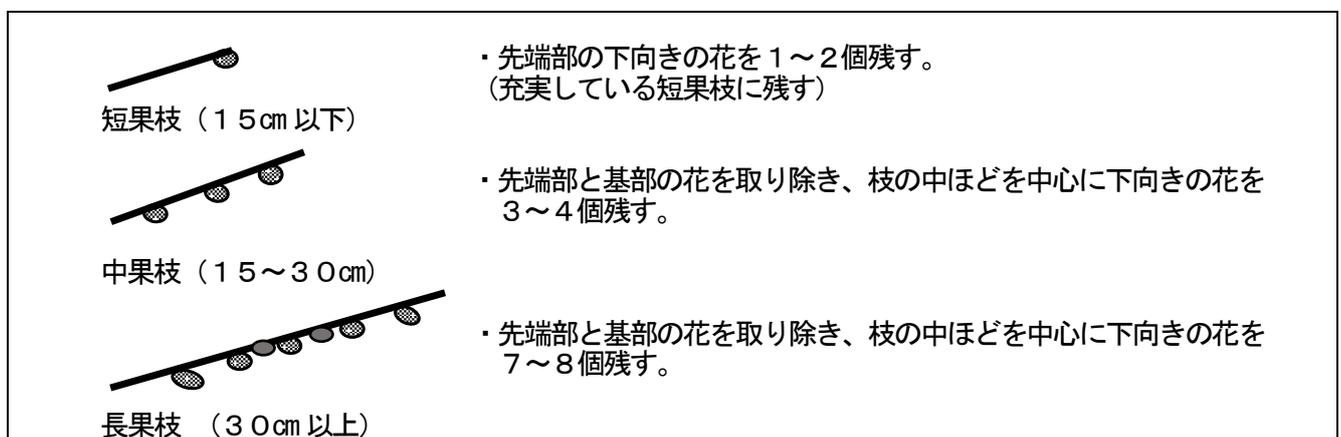


図2 70%摘花の目安

## 5 人工受粉

### (1) 花粉の採取

「あかつき」等の花粉量の多い品種を選び、摘らい作業を兼ねて果実生産に用いない上向きにつぼみや、結果枝の先端部、基部のあるつぼみを採取する。また、花粉の採取量等を考慮し、開花2～3日前の風船状になったつぼみから開花直後で葯が開いていないつぼみを選ぶ（生花1kgから葯がら付きの乾燥花粉が約20g採れるので採取量の目安にする）。なお、花粉の発芽率を下げないため、なるべく湿り気がない状態で採取する（図3）。



図3 採取適期の目安

### (2) 受粉作業の注意点

**風が無く温度の高い時間帯を選び、できる限り複数回実施してください。**

「川中島白桃」の場合、人工受粉用として10aあたり生花1.5kg程度が必要となる。モモは開花から3～4日後までの受精能力が高いので、人工受粉は5分咲き頃と満開期を目安に2回程度実施する。 梵天を用いて行う場合は、花びらがピンク色になった花をめがけて受粉する（図4）。

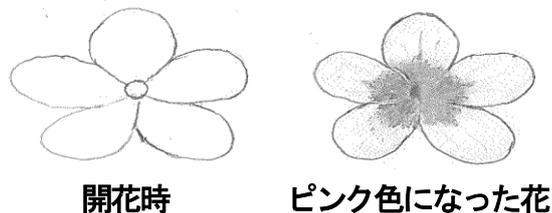


図4 受粉する花の状態

受粉用にミスト機やラブタッチなどを使用する場合は、風が無く暖かい日（15℃以上が望ましい）の暖かい時間帯をねらって実施する。 10℃以下の低温の日は受粉効果が低下するので注意する。増量剤（石松子）を使用する場合は、花粉体積の2～3倍に希釈して使用する。

### (3) 花粉の取り扱いについて

保管及び受粉の際には、以下の点に注意して取り扱う。

ア 花粉は直射日光が当たらず湿度が上がらない場所に保管し、その日に使う分だけを出して使用する。 増量剤を使用する場合は、発芽率が低下するので希釈後は早めに使用する。

イ 常温で保管する場合は5日以内に使用する。

ウ 翌年に使用するため花粉を長期保存する場合は、以下の点に注意する。

（ア）茶筒など密閉できる容器に小分けにし、乾燥材（シリカゲル等）を花粉重量と同量以上入れ、テープで密封した後、-20℃以下の冷凍庫で貯蔵する。

（イ）長期貯蔵した花粉を使用する場合は、前日に冷凍庫から取り出し、室温で半日程度順化させてから使用する。また、短時間で順化させたい場合は、発泡スチロール等の密閉容器と濡れタオルを用い、湿度90%程度、室温4～20℃の条件下で2時間程度順化させる。

## 6 モモせん孔細菌病対策

**例年、この時期に春型枝病斑の発生が確認されています。  
枝病斑のせん除徹底をお願いします。**

今年の越冬菌密度は平年並であり、昨年よりも多い状況であると考えられるため、以下の防除対策を徹底する。

### (1) 春型枝病斑の除去

- ア 1年枝の黒変や新梢葉の生育不良を目安に発病が疑われる枝は見つけ次第、切除する(図5)。
- イ 病斑から水滴により菌が移動している可能性があることから、短果枝は基部ごと、中長果枝は基部ごとまたは基部付近の葉芽まで切除する。
- ウ 第2回のICボルドー66D、第4回のクプロシールド(クレフノン加用)を散布後、樹体が白く汚れるため春型枝病斑が見えにくくなる。そのため、散布前に春型枝病斑を切除する時間を設ける。

### (2) 薬剤散布

春型枝病斑からの伝染を防ぐため防除暦に従って薬剤散布を徹底する。

- ア 第4回のクプロシールド使用に当たっての注意点
  - (ア) 葉害防止のため、単用では使用せず必ずクレフノンを混用する。
  - (イ) クレフノンは直接SSのタンクに入れず、いったんバケツで完全に溶かしてから散布直前にタンクに入れる。
  - (ウ) クレフノンは葉害防止を目的としたカルシウム剤であり液肥の代わりにはならないことから、日持ち性向上等のカルシウム補給については、別途実施する。
  - (エ) 昨年高温時に散布したことにより、葉に穴が空く葉害が発生したケースが見られたことから、防除の際は、気象情報を確認し気温が高い日の薬剤散布は避ける。



図5 モモせん孔細菌病の春型枝病斑

## 6 うどんこ病対策

一昨年多発したうどんこ病対策として、モモの感染時期である「落花直後～落花20日後」までに園地周辺のバラ科植物を除去する。また、周辺に自分のリンゴ園地がある場合は、うどんこ病防除を徹底する。

## 7 その他

### (1) 発芽～開花期における干ばつ対策

開花に必要な水分及び養分を補い、初期生育を促進するため必要に応じてかん水を実施する。春先のかん水は、1回あたり15～20mm程度を目安に5～7日程度の間隔で実施する。

**◎農作業事故に注意して作業を進めましょう！**

**◎防除日誌への記載漏れの無いように  
農薬散布後は、忘れずに防除日誌へ記帳しましょう！**

**◎農薬散布の際は隣接する作物に飛散しないように注意しましょう！**